

The Japan Society for Intercultural Studies

日本国際文化学会 ニューズレター

第7号 2004年11月26日発行

編集・発行

日本国際文化学会事務局

〒520-2194

滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5

龍谷大学瀬田学舎 日本国際文化学会事務局

TEL/FAX 077-543-7866

<http://www.world.ryukoku.ac.jp/jsics/>

来年度からの新体制が決まりました！



第3回全国大会（神戸大学）における懇親会

松井賢一氏

日本国際文化学会では、本年3月に初めての理事選挙をおこないました。その結果、25名の新理事予定者が選出されました。その他に、選挙細則により、現常任理事が5名の新理事予定者を推薦しました。この30名により構成される新理事会の任期は、2005年4月から2年間になります。

これを受けて、7月3日の神戸大学での全国大会の際に新理事予定者会議がおこなわれました。そして、新理事予定者の互選により、現在の平野健一郎会長の後任として、次期会長に松井賢一氏、また副会長に熊田泰章氏、寺田元一氏が選出されました。あわせて、会長・副会長を含む常任理事8名が選出されています。さらに、この新理事予定者会議において、会則に記載されている幹事5名を正式に選出し、これについては来年4月を待たずに常任理事会への出席を始めとした仕事を開始することが決定されました。

これらの新体制の顔ぶれをご紹介します。（敬称略、五十音順）

会 長：松井賢一（龍谷大学）

副 会 長：熊田泰章（法政大学）、寺田元一（名古屋市立大学）

常 任 理 事：岡真理子（国際交流基金）、木下資一（神戸大学）、小林哲也（京都大学名誉教授）、鳥飼玖美子（立教大学）、平野健一郎（早稲田大学）

幹 事：植野雄司（プール学院大学）、川村陶子（成蹊大学）、松居竜五（龍谷大学）、カルロス・マリア・レイナルース（龍谷大学）、他一名（未定）

新理事予定者：相原次男（山口県立大学）、赤阪賢（京都府立大学）、池上裕子（成蹊大学）、生駒孝彰（龍谷大学）、井原聰（東北大学）、岡真理子、小川忠（国際交流基金）、金子文夫（横浜市立大学）、川村陶子、木下資一（神戸大学）、熊田泰章、合田濤（神戸大学）、小林公司（北海道東海大学）、小林哲也、小矢野哲夫（大阪外国語大学）、白石さや（東京大学）、須藤健一（神戸大学）、立本成文（中部大学）、寺田元一、鳥飼玖美子、長崎暢子（龍谷大学）、中野佳代子（国際文化フォーラム）、長谷川雄一（駒沢女子大学）、平野健一郎、松井賢一、松居竜五、安野早己（山口県立大学）、湯浅英男（神戸大学）、若林一平（文教大学）、渡辺光一（駒沢女子大学）

研究会の開催について

日本国際文化学会では、今年度より常任理事会に付随して研究会をおこなっています。はがきなどでお知らせしておりますように、これまで、以下のようなかたちで三回の研究会が開かれています。今後も、国際文化学に関わるこうした研究会を続けていきたいと思っておりますので、会員のみならずには奮ってご参加いただけますようお願いいたします。なお、研究会のお知らせは今後も郵送などおこないますが、学会HPにも掲示しておりますので、そちらもご参照ください。

第一回研究会 2003年12月6日(土) 午後4時～6時 於龍谷大学大宮学舎
西堀文隆(龍谷大学)「社会科学とグローバリゼーション」

第二回研究会 2004年4月10日(土) 午後5時～6時30分 於神戸大学国際文化学部棟
小笠原博毅(神戸大学)「イギリスにおけるカルチュラル・スタディーズ
の現状と問題点：その批判的検証」

第三回研究会 2004年10月23日(土) 午後2時～4時 於法政大学ポアソナードタワー
林 夏生(富山大学)「日韓大衆文化交流の最前線」

今回は、第三回に発表していただいた林夏生氏に、その内容の報告をご寄稿いただきました。以下、これを掲載いたします。

「日韓大衆文化交流の最前線」

林 夏生(富山大学)

周知の通り、韓国では長年にわたって日本大衆文化の輸入や公開が事実上、禁止されてきた。しかし1998年10月に金大中政権がその段階的開放(=解禁)政策を打ち出して以来、日韓大衆文化交流は急速に拡大し、その最前線ではこれまでの日韓関係からは予想しえなかったような現象や変化が次々と起きている。

例えば2004年の日本では、「冬のソナタ」をはじめとする韓国TVドラマがかつてない人気を集め、DVDやシナリオ本、写真集といった関連商品が記録的な売り上げを達成して話題となった。また、ロケ地ツアーを利用して韓国を訪れる日本人観光客が急増するなど、幅広い波及効果も見られた。

台湾や香港、シンガポールなどの中華圏では韓国

のTVドラマやポピュラー音楽はすでに1990年代後半から人気があり、「韓流」とは元来こうした地域での韓国大衆文化ブームを指す新語であった。日本では「シュリ」「JSA」といった韓国映画が好調な成績を収めたのが2000年以降、韓国TVドラマの本格的な放送開始は2002年以降であるから、その意味では日本版「韓流」はやや遅れ気味にやって来て、予想を上回る速度でブーム拡大を迎えたと言える。

いっぽう2004年の韓国でも、日本との大衆文化交流は新たな局面を迎えていたが、それは日本とは違う意味において予想と異なるものであった。

2000年の第3次開放まで順調に進められてきた日本大衆文化の追加開放は、2001年の日本の歴史教科書検定や小泉首相の靖国神社参拝問題めぐって韓国の世論が硬化したため、同年7月に一旦「無期延期」宣告を受けることとなった。2004年1月1日は、こうした紆余曲折を乗り越え、盧武鉉

政権が3年ぶりの追加開放を実施する日でもあった。中でも韓国社会の注目は、日本人歌手のCDの販売や日本製TVドラマの放映が新たに許可されることの影響の大きさに集まった。なぜなら韓国では、これらの日本大衆文化産品が韓国製のものより競争力が強いと信じられていたからだ。

ところがいざ実際に開放してみると、日本人歌手のCDの売れ行きは特にめざましいものではなく、また日本製TVドラマの視聴率も、予想を下回る低いレベルで伸び悩むという結果を迎えてしまったのである。

ではなぜ、2004年の日韓大衆文化交流はこのように非対称な現象を示すに至ったのだろうか。その理由としては様々なものが考えられるが、少なくとも日本側の韓流ブームの陰には、韓国大衆文化産品の質の向上のみならず、それがこれまで十分に紹介されていなかったことによる「目新しさ」のインパクトが含まれていたことは間違いない。

ところが韓国では、日本の漫画から歌謡曲、映画、TVドラマに至るまでの多様な大衆文化が、「非公式」な流入－日本旅行のお土産から複製された海賊版、さらにはインターネット上のファイル共有・交換ソフトを介したものなども含めて紹介され、現実には大量に流入していたのである。

言うまでもなく海賊版製品の横行は国際的な知的所有権保護の潮流から外れるものであり、同時に巡り巡って国内大衆文化産業に対する需要を蚕食するという危険をもつ。実は、こうした非公式的流入をきちんと制限し、国内の文化産業を育成しながら、評価すべき日本の大衆文化を正面から受け入れるようにしようというのが、韓国が日本大衆文化開放へと政策を転換した理由のひとつだったのだ。

日本ではこれまで、韓国の日本大衆文化規制政策について、どちらかという「対日外交政策」(未精算の歴史問題に対する抗議表明)の一環として理解する傾向が強かった。もちろんその側面は今もって重要な意味を持っているし、韓国政府が日本大衆文化の段階的開放という政策に乗せて日本に示したのも「すべてはもう済んだこと」ではなく「ここから新しい関係をはじめて過去をのりこえよう」というメッセージを伝える手段であったと見るべきであろう。

と同時に、現実の韓国の大衆文化交流規制／促進政策には、外来文化による望ましくない影響を避けながら国内文化統合を進めようとする「文化政策」や、国内文化産業を保護・育成するという「産業政策」の機能もまた重ね合わされていた。実際、韓国は1980年代末から文化産業振興を国家プロジェクトとして掲げてきた数少ない例のひとつであり、1997年の経済危機以後にはその勢いにさらに拍車がかかっている。

日本版「韓流」の到来や韓国の日本大衆文化開放は、こうした韓国側の努力の成果であるとともに、日韓双方における文化産業ビジネスの参加者たちにとってはようやく巡ってきた絶好の好機でもあった。それゆえ今後とも、文化産業セクターからは継続して日韓大衆文化の魅力に磨きをかけ、それを消費者に向け最大限にアピールするための工夫や戦略が打ち出されてくるであろうし、そのことが日韓大衆文化交流を持続的なものとして定着させる上で重要な役割を果たすことにもなるだろう。実際に政府レベルの交流事業でも、2002年の「日韓国民交流年」や2005年の「日韓友情年」のように、キャンペーンには人気俳優などを積極的に起用するようになっていく。

確かに大衆文化交流は、相手国に親しみや憧れをもたせ、実際に観光客などの形でヒトを移動させる上での重要なきっかけになる場合が多い。そして中には、例えば「冬ソナ」に惹かれて韓国語を学び、ロケ地ツアーに参加した観光客が、韓国に行ってみてはじめて韓国の食文化や生活文化に関心を持つようになり、やがて韓国の人たちから直接キムチ作りを教えてもらう…というように、最初の入り口からは想像もつかないほど文化交流の幅や広がり拡大させていくケースも、これからは増えていくかもしれない。

大ヒットドラマや特定の俳優の人気に沸き立ったブームのエネルギーを、どうすれば(伝統文化や少数者の文化など、商業ベースに乗りにくいものも含め)双方の国民の中にある「多様な文化」のふれあいへと接続させ、発展させていけるのか。そこにこそ今、金大中政権が大衆文化開放の目標として掲げた「国民レベルの交流」を実現するためのカギが潜んでいるように思われる。

常任理事会報告

第15回

2004年6月5日(土) 午後2時~4時45分

早稲田大学国際会議場

1. 第3回全国大会について
2. 理事選挙投票結果について
3. 第3回総会用資料の検討について
4. 次回大会開催日時・場所について
(法政大学に決定)
5. その他

第16回

2004年7月3日(土) 午前10時~11時30分

神戸大学国際文化学部棟

1. 第3回全国大会について
2. 第3回総会用資料について
3. インターカルチュラル第3号について
4. その他

第17回

2004年10月9日(土) 午後1時30分~3時30分
法政大学市ヶ谷キャンパス

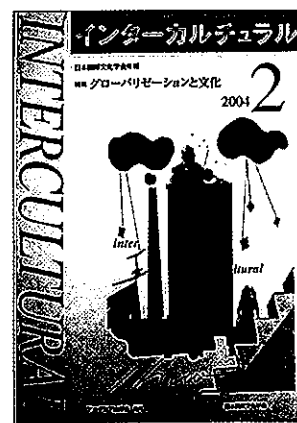
1. ニュースレター第7号について
2. インターカルチュラル第3号について
3. 第4回全国大会について
4. その他

information

日本国際文化学会では、毎年度学会誌『インターカルチュラル』を発行しております。現在の編集長は合田濤常任理事(神戸大学)です。第1号、第2号はともに2,000円で残部がありますので御入り用の方は学会事務局またはアカデミア出版会(TEL.075-771-7055)までお問い合わせください。



「インターカルチュラル1」
2003年7月30日発行



「インターカルチュラル2」
2004年5月20日発行